

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所

162-0805 東京都新宿区矢来町 65

電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175

発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

ヒロシマ、ナガサキ、ビキニ、フクシマ

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤牧人

私は、標記の言葉が、一連の言葉として歴史の中に強く刻まれ遺されていくのではないかと思うようになりました。ヒロシマ、ナガサキ、ビキニはすでに遺されていますが、そこにフクシマが加わることでしょう。放射能による被爆・被曝です。この歴史の事実をどのように学び、それを教訓としていくか、鋭く問いかけられているのではないのでしょうか。

「何しろ、止めたくても止められないという原子力の恐ろしさを思い知った。」という新聞記事の一節が目にとまりました。

今回の地震以来、原子力発電に関しての賛否両論が連日様々なところで交わされています。それぞれに学者・専門家と言われている方々が意見を述べておられますが、何が正確なところなのか分からない。また、考えたくもないが、そこには「利権」ということも言われています。そのような中で、物事を考える自分の視点をどこに持つか、ということの重要性を改めて思っています。

止めたくても止められない、ということに関連して、一つの話を出しました。遊園地にジェットコースターがあります。人気があり、人々は楽しんでます。あのジェットコースターには科学技術の粋が詰まっているとされます。どのような技術かと言いますと、それは速く走らせるというのではなく、短い距離でいかに止めるかという技術なのだそうです。止めることができなければ、走らせることができないということなのでしょう。

原子力発電によって、確かに私たちはその恩恵にあずかってきたと思います。しかし、今回のことで、その廃棄物の最終処理の技術が確立していないということ、改めて強く気づかされたのではないのでしょうか。放射能のゴミの完全処理の技術が確立していないのです。高レベル放射性廃棄物は100万年もの間隔離しなければならないとのことです。100万年前とは原人ピテカントロプスの時代だとのことです。今の廃棄物がこれから100万年後まで影響を及ぼすということは、想像を絶することです。生物にとってそれが安全なものならば、安全に処理することができる技術が確立しているならば、安心します

□会議・プログラム等予定

(7月25日以降および

前回報告以降追加分)

7月

- 14日(木) 第3回東日本大震災各教区対策本部担当者の会(仙台)
- 28日(木) 主事会議

8月

- 3日(水) 「いっしょに歩こう!」プロジェクト 運営委員会(仙台)
- 8日(月) 教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員会
- 24日(水) 正義と平和・沖縄プロジェクト(沖縄)
- 29日(月) ~ 30日(火) 管区人権担当者会(仙台)(前号を訂正)

9月

- 6日(火) ナザレ修女会の修道生活を支える会
- 6日(火) 礼拝委員会
- 8日(木) 文書保管委員会
- 8日(木) 58-8 常議員会(9月14日から変更)
- 9日(金) 懲戒及び管区審判廷規則検討特別委員会
- 12日(月) 正義と平和委員会(大阪)
- 20日(火) 年金委員会・年金維持資金管理委員会合同委員会
- 26日(月) 各教区宣教担当者・宣教協議会実行委員会合同会議(京都)
- 26日(月) ~ 27日(火) 宣教協議会実行委員会(京都)
- 27日(火) ~ 29日(木) 主教会(神戸教区)

<関係諸団体会議等>

- 7月25日(月) ~ 26日(火) 第15回外登法問題国際シンポジウム〔在日韓国YMCA〕
- 8月2日(火) NCC平和憲法プロジェクト
- 4日(木) 比叡山宗教サミット
- 24日(水) ~ 26日(金) 聖公会関係学校教職員研修会(立教女学院)

(次頁へ続く)

●管区事務所夏期休業

8月15日(月) ~ 8月19日(金) の間休業します。よろしくお願ひいたします。緊急の場合は総主事まで連絡ください。

が、そうではない状況は、何をすればよいのかと、今の人間が考えなければならない事柄でしょう。

大阪教区の前田光雄司祭がGFSの機関紙220号に「原発」から「肥溜」へという文章を書かれています。まだ読まれていなければ、是非お読みになって欲しいと思います。最終処理問題の答えの一つが肥溜論(?)で示されています。

神さまから私たち一人ひとりに与えられている人間の知恵を、どのように発揮していくか、そしてそれを発揮する視点をどこにおくのかということの重要さを意識したいものです。それは「いのち」を大切にするという視点に尽きるのではないかと思います。

私たちは、ヒロシマ、ナガサキでの被爆、ビキニ、フクシマでの被曝をしっかりと記憶にとどめておきたいものです。1954年の3月1日にマーシャル諸島のビキニ環礁で行われた水爆実験で、第五福竜丸が被曝しました。その乗組員で

(前頁より)

24日(水)～9月3日(土) 全聖公会総主事会議(メキシコシティ)
26日(金) NCC 常任常議員会

あった久保山無線長が半年後に亡くなれましたが「原水爆による犠牲者は、私で最後にして欲しい」と遺言をされたとのこと。これも教訓にしなければならないでしょう。

これから8月を迎えます。平和を意識する月であるとも言えます。平和はいのちを大切にすること、と言い換えることもできるのではないのでしょうか。その構築に向かって、私たちは一步一步と歩みを続けていきたいものです。キリスト者として。

□常議員会

第58回(定期)総会后第7回 7月6日(水)
主な議事

<決議事項>

1. 日本盲人キリスト教伝道協議会理事派遣の件
司祭 大森明彦 師〔東京〕を理事(再任)として派遣
(任期:2011年7月～2013年7月)
2. 宗教法人「日本聖公会東京教区」規則一部変更の件(宗教法人「日本聖公会」責任役員会決議)
宗教法人「日本聖公会東京教区」規則第42条および第43条(公益事業の経営)の改正を承認。
3. 大齋克己献金「国内伝道強化のため」の件
主事会議の提案を受けて、次のとおりとした。〈下記第58(定期)総会期第13回主事会議協議事項4.参照〉
 - 1) 主事会議提案の大筋を認める。
 - 2) 選定基準を整備し、再提案せしめる。
4. 「いっしょに歩こう!プロジェクト」予算の件

〔運営委員会提出〕

- 1) 未だ具体的な数字を入れられない部分もあるが、すでに事業が進行中であるので、その考え方によって進めることを了承する。(6月23日現在)

収入予定〈確定〉金額	464,800,000円
（内国内外募金	134,800,000円
入金予定分	250,000,000円
支出仮合計	149,470,000円

- 2) 募金について
当初の緊急募金から「いっしょに歩こう!プロジェクト」募金へとシフトすることを、報せていくよう助言
5. 首座主教海外出張の件
以下の出張を承認
 - ・目的: 米国聖公会主教会
 - ・期間: 9月15日(木)～21日(水)
 - ・場所: エクアドル キト

次回以降の常議員会

9月8日(木)、10月28日(金)

□主事会議

第58(定期)総会期第14回、7月28日(木)
[主な協議事項]

1. Webサイト・ライブラリー収録基準に関して
標記「収録基準」について文書保管委員から意見が出され、再検討した。
2. 点字と墨字の礼拝用書頁対照表に関して
視覚障がい者の信徒からの要望を受けて、礼拝司式者が点字の頁を知らせるための「礼拝用書の点字と墨字頁対照表」を作ることにした。
3. 日本盲人キリスト教伝道協議会理事推薦に関して
理事として大森明彦司祭を引き続き派遣することとし、常議員会で承認を求めることにした。〈常議員会決議事項1.〉
4. 大斎克己献金「国内伝道強化のため」に関して
主教会、常議員会、主事会議の三者の意見を集約し、次のとおりとした。

- (1) 現在の大斎克己献金奉獻先の3本柱〔①国内伝道強化、②海外教会宣教協力、③国内宣教協力〕を堅持する。
 - (2) 国内伝道強化の内容を次のとおりとする。
 - ①教会建物を建築しての新たな伝道のために
 - ②宣教活動のために
 - ③宣教活動のための拠点のために
 - (3) 年間複数の活動への支出を可とする。上限合計1,000万円。
5. 大震災被災教区の管区分担金免除・軽減に関して
本年より実施すべく検討するよう、主教会より指示を受けた。
原資、期間等詳細の検討を財政主査会に委ねることとした。
 6. 東日本大震災復興・復旧の基準に関して
以下の意見を運営委員会に述べることにした。
教会、幼稚園・保育園(宗教法人、学校法人、社会福祉法人)の建物への復興・復旧

の支援(基準)については、当該教区に作成依頼中の被災状況一覧表に基づいて考慮すること。

7. 緊急支援募金終了に関して
緊急支援募金終了の時期、以後の募金受け皿、その名称、目標額、募金期間等について運営委員会に意見を述べることにした。
8. その他
 - (1) アングリカン・センター、ローマへの寄付金について
2009年で終了したことを確認、当面は寄付を見合わせる。
 - (2) CCEA総会出席者について
本年10月5日～10日、クチン(マレーシア)にて開催される出席者について確認。主教、司祭(執事)、青年、信徒、各1名。

次回以降の会議：7月28日(木)

□各教区

大阪

- ・聖ルカ教会 7月8日(金) 聖別解除式。東光学園の建て替えに伴い、取り壊し。礼拝堂が整備されるまで、主日礼拝などは河内館(会館)にて行われる。

神戸

- ・教区主事に大東正人氏(神戸聖ミカエル教会信徒)が就任。(7月1日付)

京阪神聖公会日立ボランティアセンター

- ・第1期活動を終了。6月30日(木)日立聖アンデレ教会にて閉所式。今後はベースをいわき市内(予定)に移し、「いっしょに歩こう!プロジェクト」の一環として第2期活動を開始する。期間は7月1日より1年を目処とする。



† 逝去者 靈魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 マッテヤ末永 恵(北関東教区・退職)

2011年7月19日(火) 逝去(82歳)

《人 事》

東京

司祭 ヨナ成 成鍾 2011年4月1日付 大韓聖公会釜山教区より東京教区移籍許可
 司祭 ドミニカ朴 美賢 2011年4月1日付 大韓聖公会釜山教区より東京教区移籍許可
 司祭 バルトロマイ竹内謙太郎(退)
 2011年5月31日付 牛込聖公会聖バルナバ教会協力司祭解任
 <信徒奉事者認可および分餐奉仕許可> (任期:2011年6月21日~2012年3月31日)
 (東京聖テモテ教会) 黒澤圭子、横山 融

◆2011年沖縄週間／沖縄の旅・報告と成果

「基地・経済・いのち」

正義と平和委員会 沖縄プロジェクト 司祭 アンデレ 磯 晴久

2011年「沖縄週間／沖縄の旅」を無事終えることができました。始めから終わりまで導いてくださった主イエスに感謝します。また、お祈りとご支援・協働を頂きました皆様、殊に沖縄教区の皆様に感謝します。

今回は、3月11日に東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）が起こり、この未曾有の大災害と原発事故を目の当たりにし、私は今年この旅を実施していいのだろうか正直悩んだ時期がありました。しかし、沖縄の置かれている状況の

深刻さに思いを致す時、「この旅は継続していかなくてはならない」そういう思いが強くなっていました。私たちは、東北で被災された方々の事や原発問題も決して忘れてはなりません、同じように沖縄の人々が負わされている問題を決して忘れてはならないのです。それは私たちの問題だからです。

まず私の心に刻まれた2人の方から頂いたことばをご紹介します。一つは、旅の準備で訪れた辺野古で、座り込みに来ておられた日本基督教団平良修牧師にお会いし、同牧師から伺ったこと

でした。その内容とは、「沖縄というと癒しのイメージがあるし、東北の大地震で被災された方々を、沖縄でも受け入れようという声があるが、もちろん支援していくことは大切だが、忘れてはならないことがある。それは、沖縄は本当に危険な場所だということです。」

この平良牧師の言葉を私たちは、第1日目6月17日の午後に追体験することにな



辺野古キャンプ・シュワブとの間を隔てる壁と抗議の旗

ります。この日の午後最初のプログラムは「普天間基地を知る」でした。沖縄キリスト教センター又吉さんにガイドして頂いて、フェンスの周りを歩いて回るなど普天間基地の大きさ（宜野湾市の約26%が普天間基地）とどれほど危険な基地であるかを実感しました。この基地は米軍が海兵隊のヘリコプター部隊を海外に常駐させている唯一の基地でアジアへの侵入口として重視されています。ヘリコプター民間地域上空へのはみだし飛行を行い、固定翼機もタッチ・アンド・ゴーの訓練を繰り返しています。夜間にも危険な訓練をしていると聞きました。この基地の周囲には19の小中高と大学、69の幼稚園保育園が本当に目と鼻の先にあります。途中訪れた沖縄国際大学には、2004年8月米海兵隊CH53ヘリが大学構内に墜落しました。基地と大学は10～15メートルも離れていません。墜落直後米海兵隊によって大学は占拠され、日本の警察は一切調査も何もさせてもらえませんでした。沖縄は今も実質米軍の支配下にあります。奇跡的に住民や学生にけが人はありませんでしたが、ヘリにはストロンチウム（核分裂によって生じ、半減期はおよそ30年、人体に及ぼす影響が大きい）が使用されていて、事故で近隣の方々が被爆した可能性があるとのことでした。なぜそのような危険な場所に学校や園、住宅があるのか。米軍が力で沖縄の人々の一番いい土地を奪い、安保の名の下に、基地を置き続け、それを日本政府が容認しているからです。もう一つの危険について、この夜衝撃的な映画を見、この映画の監督である藤本幸久さんの講演に耳を傾けました。「ワンショット・ワンキル」です。アメリカのまだあどけなさを残す志願兵の青年たちが、どのようにして、殺人マシーンに仕立て上げられていくかが、赤裸々に映し出されていました。彼らも犠牲者ですが、人間性を奪われた彼らが沖縄で事件を起こすのです。沖縄は危険な場所なのです。「基地は沖縄県外へ」「沖縄に押し付けてきた基地を引き取ってほしい」「そこから本当の議論

が始まる」等々又吉さんの訴えを聞いて、これは日本人の問題であり、沖縄の人々に先頭に立ってもらうのではなく、私たちこそが先頭に立たないといけないということを痛感しました。

もう一つ心に残ったことばは、2日目南部戦跡コース（この日、参加者2グループに分かれました。高江・辺野古コースと南部戦跡コースで、私は南部戦跡コースに参加）でガイドをしてくださった川上さんの次のようなことばでした。「東北の大地震・津波で多くの人々が流され、人々の涙、苦しみ、悲しみ、喜び、夢が沢山大地に埋もれている。同じように今も沖縄の大地には、戦争で亡くなられた方々の涙、苦しみ、悲しみ、喜び、夢が沢山埋もれているのです。」18日の南部戦跡コース、19日の沖縄教区行事「慰霊の日」のプログラムを通して、この川上さんのことばは本当にそうだと思われました。



糸数アブチラガマ

18日に訪れた南風原文化センターで見せて頂いた沖縄戦のDVDは南風原で起こったことに留まらず、沖縄戦の真の姿を伝える映像でした。私自身3度目であった糸数アブチラガマ訪問も、ガマの暗闇の中で、地獄の体験をされ、苦悶の叫びをあげながら死んでいった、また逃げ惑った多くの命に思いを馳せる時、胸締め付けられる思いが致しました。そして摩文仁丘の韓国人慰霊の塔。沖縄にも多数の朝鮮半島出身者が強制連行され、過酷な労働や従軍慰安婦

として使役され、沖縄戦では1万人以上が死亡・虐殺されました。1975年建立された塔です。碑文には英霊とあり、ある政治的な意図を感じます。平和の礎の近くにある都道府県の慰霊塔も含め、靖国神社に通じるものを感じました。

今回沖縄の旅が開催された6月17日～20日は、今から66年前、本土決戦の捨て石とされた沖縄で、戦闘が一段と激しさを増し、兵隊だけでなく沖縄の一般民衆が多く犠牲となっていった時期と重なっていましたので、訪問する先々で、心痛く、重くのしかかってくるものがありました。

たとえば、19日(日)前日からホームステイさせて頂いたそれぞれの教会での主日礼拝後、沖縄の旅参加者は沖縄教区主催「沖縄慰霊の日」礼拝に出席するため諸魂教会に参集しました。その礼拝の中で、沖縄戦で逝去され、今年新たにお名前が判明した方を、沖縄教区の信徒代表の方々が読み上げるのですが、その人数が245名もありました。私は、まだまだ沖縄の地中(海中)に埋まったままの多くの「無念」があることを知らされ、戦争はまだ終わっていないと強く感じました。

礼拝後、特別ゲスト李在禎(イ・ジェジョン)司祭(大韓聖公会 聖公会大学総長 元統一部長官)による講演会がありました。主題は、「東アジアの平和と沖縄への想い」。韓国の民主化闘争の歴史を踏み直しながら、市民精神をもって平和を渴望し—平和は戦いのない状態ではなく、正義が生きている世界—、行動を起こしていこうと呼びかけ、沖縄との連帯をよびかけてくださいました。そのほか、沖縄教区の皆様との豊かで心温まる交流もありました。

今、サブテーマ「基地・経済・いのち」の経済に関することを十分に掘り下げることができなかったと反省しております。また平和憲法がまだ一度も適用されたことがない沖縄の現実に触れ、憲法9条についても更に学びを深め、考えて行かなければならないと感じました。私たちはどうすれば平和を実現することができるのだろうか。イエスが世に与えようとされている平和とはどういう平和であろうか。課題を投げかけられ

た旅でした。

最後に、6月23日平和記念公園で開催された沖縄全戦没者追悼式で朗読された嘉味田朝香さんの詩をご紹介します。希望のメッセージとして報告を閉じさせて頂きます。「……私たちが忘れない限り 平和は続くだろう だからこそ 忘れてはいけない この地には たくさんの笑顔が たくさんの夢が 眠っていることを」

■ 2011年「沖縄週間/沖縄の旅」への参加者は日本聖公会9教区・47名(北海道1、東京4、横浜2、中部10、京都5、大阪7、神戸5、九州3、沖縄10)、大韓聖公会1名、日本基督教団1名でした。

沖縄の旅

石橋聖トマス教会 タビタ 長野加代子

6月17日～20日.3泊4日の“沖縄の旅”に初参加しました。那覇空港へ降りるとやはり暑い。

初日の午後、参加者は「普天間を知る」ためにバスに乗り、車窓から普天間基地・ヘリコプターの墜落事故に会った沖縄国際大学、嘉数高台を見て巡った。沖縄の方々の生活の中に基地が、爆音が、危険が入りこんでいるのがよくわかった。

夕方、教区センターに着き、受付、開会礼拝、夕食の後の映画「ワンショット、ワンキル」と映画監督藤本幸久氏の講演がもたれた。夕飯後で眠くなるのではという心配は、映画が始まると、ふっ飛び、衝撃的な画面に釘付け。アメリカの新入海兵隊員を如何に訓練していくか、弾丸のように休む間、考える間を与えず、人を殺せるように改造して行く様子が、生々しく映し出された。

終了後も、暫らくは言葉もなかった。アメリカ社会の底辺で貧しく生きる若者が兵役が終われば、大学へ行って勉強するのを目指して入隊するそうだが、それが叶うのは僅かのひとりで、多く

は傷つき、精神的に病んで帰ってくるそうです。

多くの裕福なアメリカ人は、そういう状況を見て見ぬふりをして過ごしているそうです。

2日目は高江・辺野古コースと南部戦跡コースの二手に分かれ、私は高江・辺野古コースに参加しました。高江は豊かな自然が残るヤンバルの森に、今でも既にヘリパットが15ヶ所(2007年8月24日現在)もあるのに、更に新しい機種の対応の為にヘリパットが建設されようとしているので、住民や支援者が昼も夜も座り込み抗議活動が続けられています。私たちもそこを訪れほんの短い時間でしたが座り込みました。その時座りこんで居た人は普段は那覇に住んでいて、その日は休みなのでここへ来ました——と現在の高江の状況を説明して下さいました。森が広がりジャングル状態の中には川も流れていて、直ぐその先は海。上陸してジャングルを想定した格好の訓練場所なんだそうです。が住人は今でも昼夜問わず、場所問わず上空を飛行訓練するのに、これ以上は絶対にヘリパットは要らないと、生活時間を割いて座り込みを続けて居られます。高江はあまり知られていない所でしょう。私も今回初めて知りました。その次は辺野古に向かいました。その日は暑い日でしたが天気がよく辺野古の海は穏やかで美しかった。この美しい自然を何故守れないのか——?人間の愚かな行為に神さまは心を痛めておられることでしょう。

その後もまだまだ続く盛り沢山のプログラム。



高江ヘリパッド建設反対見張りテント前で説明を受ける。

私は首里聖アンデレ教会に泊めて戴き、礼拝を共にしました。聖アンデレ教会の礼拝では、喜びに溢れ、賛美の心が強く感じられる活きいきとした素晴らしい礼拝でした。

北谷諸魂教会での「慰霊の日」の礼拝、参加者交流会、全体会と、全てのプログラムを沖縄教区とスタッフの方々の準備と心配りで無事終えることができました。感謝です。

3日・4日沖縄に行って何が解る?とは思いますが、この旅に参加した私は、ここで見たこと聞いたことを多くの人に伝えていくことが、とても大事だと痛感しました。そしてより多くの人が次の“沖縄の旅”に参加されることを望みます。

沖縄の旅に参加して

広島復活教会 ジュリアン 小林真綾

私は今回、広島の中高生と一緒に初めて沖縄の旅に参加しました。普段、広島で平和の勉強をしています。主には原爆のことを勉強するため、昔沖縄で何があったのかは全くといっていいほど知りませんでした。中学生の私にとって少し難しい部分もありましたが、広島では知ることのできないことをたくさん知り、考えさせられることもたくさんありました。

1日目に見た普天間基地は周りにたくさんの家や学校があり、こんなところに基地があって危険じゃないのかと思いました。数分おきに飛行機が大きな音をたてながら飛んでいて、ガイドさんの声が聞きとれないことが何度もありました。沖縄ではこのような事が当たり前のようになっていて危険がとても身近に感じられました。

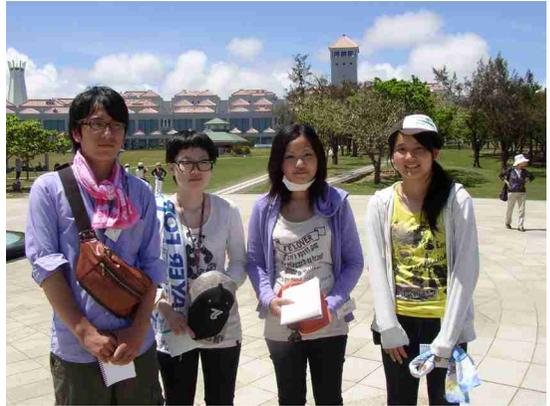
その日の夜「ワンショット・ワンキル」という映画を見ました。これは新人の海兵隊

が3ヶ月訓練を行うブートキャンプでの話です。ブートキャンプに入所するのは必ず真夜中で、バスを降りてから48時間は寝ることが許されず、心と体を疲れさせ追い込んでいきます。普通、若者の98%が「人を殺せるか?」という質問に殺せないと答えるそうですが、殺すことができるように頭の中身を入れかえ洗脳していきます。実際にこのような惨く厳しい訓練が行われていたなんて、今の私たちを取り巻く生活からは考えられないし、その話を聞いてからも想像ができませんでした。

南部戦跡巡りで糸数アブチラガマに行きました。このガマは戦争中に実際に使われていた洞窟で、600人以上の負傷兵で埋め尽くされていたそうです。中に入ってみると、足場は悪く、どこからも光が入ってこないため、真っ暗でした。当時そこで苦しみ、亡くなった人がいると思うとぞっとするものがありました。少し怖かったけど、この旅の中で一番印象に残りました。

最終日には分かち合いの時間がありました。この旅を通してどう感じたか、これから何をして

いくべきかを話し合いました。そこで私はこの沖縄の問題を沖縄の人達だけじゃなく日本の問題として考えないといけない。まだ若いから知らなくていいという思いを捨て、次世代を担う私たちがこれからどのように伝えていくかを考えないといけないと感じました。今回の沖縄の旅で経験したこと、考えたことを広島への平和礼拝でも活かしていけたらと思います。



広島から参加した中高生4人

■ 正義と平和委員会から ⑨ ----

「広島平和礼拝」

広島平和礼拝は、2005年8月から始まりました。その年が丁度、被爆60年の年ということで前年から「広島被爆60年神戸教区礼拝」が計画されます。その礼拝・行事の目的は、①60年前の広島で何が起こったのかを学ぶ、②キリストによる平和が、現在の私たちにとって、どのような意味を持つかを学ぶ、③原爆によって亡くなられた人たちの死を悼み、私たちが平和の器として用いられるように祈りを献げる、というものでした。

その翌年、『広島国際平和会議 2006』が開催され、ベティ・ウイリアムズ氏、デズモンド・ツツ大主教、ダライ・ラマ14世というノーベル平和賞受賞者が広島に来られます。その機会を捉えて、カトリック、仏教会とともに、「平和

の祈り」という集会をカトリックの世界平和記念聖堂でおこないました。この準備段階からの交わりが、5日のカトリック・聖公会の合同プログラムになっていきます。合同プログラムは、5日夕方から平和公園にある供養塔の前で、祈りの集いをした後に、記念聖堂まで平和行進をします。青年達は、ギターを弾きながら「Walk in the light」などを歌い行進を楽しんでいます。毎年、500人くらいの参加者があり、その後記念聖堂で、カトリックの祈願ミサに与ります。

6日は、8時から広島復活教会で原爆犠牲者追悼聖餐式を行い、原爆で犠牲になった人たちの魂の平安と世界平和のために祈ります。

今年から平和礼拝の目的を

1. 原爆犠牲者を追悼し、世界平和のために祈る。
2. 次代を担う人たちに原爆の悲惨さ、戦争の愚かさを伝える。

3. 「主の平和」を学び、その実現のために活動する。

に変更しました。

今年のプログラムは5日の午前中、例年と同じ平和公園の碑めぐりに加えて、カトリック記念聖堂の見学コースを新たに作りました。午後からは被爆証言、分かち合いなどを予定しています。

ただ、私が平和を考える時、一番大切にしている言葉があります。マザー・テレサは、『愛—マザー・テレサ 日本人へのメッセージ』という本の中で、中学一年生の男の子から「平和な世界についてどう考えていらっしゃいますか」と質問されて、以下のように答えておられま

す。「イエスは、この世界に平和と愛と喜びの福音を伝えるためにおいでになりました。平和とはお互いに愛し合うことができるという意味です。そのためにはお互いに知り合わなければなりません。お互いに知り合っていれば、愛し合うようになります。そしてお互いに愛し合っていれば、お互いのためになることをするようになります」と語っておられます。

広島平和礼拝が広島に来て、知らない人が知り合うことで平和を作り上げていく機会になればと考えています。

日本聖公会正義と平和委員会

神戸教区司祭 オーガスチン小林尚明

2011「日韓教会連合統一協会問題対策セミナー」に出席して

管区事務所宣教主査

司祭 ステパノ ^{タク} ^{ジウン} 卓 志雄 (東京教区)

統一協会によって行われている活動の違法性および反社会性を社会に訴え、またそれらの問題に組織的に取り組むために2004年10月組織されたキリスト教の諸教派の連合団体である「統一協会問題キリスト教連絡会」は、「2011年度日韓教会連合統一協会問題対策セミナー」出席のため、去る6月22日から24日まで韓国ソウル、大田を訪問した。今回の訪問には全国霊感商法対策弁護士連絡会、日本基督教団、カトリック中央協議会、バプテテスト連盟、日本聖公会から約20名が参加し、韓国の教会関係者ら約30人に日本における世界基督教統一神霊協会(以下、統一協会)の活動の違法性や反社会性を訴え、また日本と韓国の教会がこれらの問題に対して共同して取り組んでいく機会となった。今年には特に韓国における最近のカルトの動向および日本における「反統一協会運動」に関する統一協会の動きに対する報告や対策、また

合同結婚式によって韓国にいる7千人の日本人女性に対する対策などが協議された。

初日は大韓イエス教長老会(統合派)の崔サムギョン牧師の「韓国キリスト教の異端似非(カルト)集団と対策」というタイトルの講演から始まった。崔牧師によると最近、韓国から日本に流入するカルトが増えているとのこと。「現在、韓国におけるカルト信者は約100万人を超えると推定されるが、それらの殆どは元正統教会の信者である」とし、「すべてのキリスト教信者がカルトに対して共同の使命を持って警戒しなければならない。それとともに正しい救いの確信を持つことも必要である」とした。また「聖職者は、カルトについての情報を収集して信者に知らせ、カルト専門研究機関、相談専門機関の活動を支えなければならない」と述べた。

続いて日本側から日本基督教団の清水与志雄牧師が「統一教在韓夫人の自立・解放のために、私たちにできること」というテーマを取り上げ、日韓における統一協会の問題点を指摘した。昨年韓国の放送局SBSは「日本の人権弁護士、キリスト教の聖職者が統一協会の信者に対して強制改宗教育、強制拉致を行っている」と事実と異なる番組を放映したが、清水牧師はそれに対して「私たちの活動は、日本国内における統一協会の正体をかくした勧誘やマインドコントロール、霊感商法による金銭被害や合同結婚の強制による婚姻の自由の侵害などの被害に対する取り組みであって、決して拉致監禁ではない」ことを訴えた。また「日本における統一協会問題は宗教の問題だけでなく、人権問題にもつながる」とし、「統一協会による宗教詐欺の被害者の人権を守ること、すなわち詐欺の事実を気付かせる活動は必要である。これは人権回復の活動であり、多くの病人を癒された主イエス・キリストの宣教の一環である」と述べた。

講演会の後、両国の関係者は、カルト対策に関する協力案について議論を行った。この席で日本基督教団宣教委員長張田眞牧師は「現在日本では、統一協会と摂理が大きな社会問題を引き起こしている」とし「特に統一協会の場合、日本の女性たちが合同結婚式によって韓国に渡った後、連絡が途絶えている事例が発生し、家族の心を痛めている。韓国に居住する統一協会の

日本人女性信者7千人の消息を知りたい。助けしてほしい」と訴えた。これに対して韓国側の牧師および弁護士は「7千人の女性のための相談窓口および駆込み寺のようなシェルターを作ることを優先しなければならないが、この部分については引き続き共同研究する必要がある」との立場を表明した。セミナーの最後の日程は、忠清南道と大田地域におけるカルト集団の施設、集会所の現場見学をもって終わった。

今日のグローバル化に伴い、カルト団体も国際化し、その姿を巧みに変え、見極め難しくなっている。そのもとで苦しむ人々も絶えず生み出され、社会的な問題を引き起こしており、また、私たちの教会にも好ましからざる影響を与えている。特に、統一協会を始めとするカルト団体は日本の社会で大きな社会問題を、なおも引き起こしており、その被害相談は絶えることがない。このセミナーにおいて、それぞれ知り得ている情報を共有し、理解を深め、取り組むべき課題を明確に教えられて、宣教の働きに仕えていくことが確認された。日本聖公会をはじめとする日本のキリスト教会は、今まで少数によって進められてきた人権的次元の活動に対してより深い関心を持ちつつ、統一協会を始めとするカルト団体の活動はイエス・キリストの救いのみ業に対する否定であること、また神様にかたどって創られた尊い人間の存在の否定であることを常に忘れてはいけぬ。



第20回GFS世界会議に参加して

東京教区GFS支部長 水谷 治子

日本聖公会の皆さま、お祈りとお支えをありがとうございました。皆さまのおかげで6月24日から7月4日までアイルランド、ダブリンで開かれたGFS世界会議にデリゲートとして参加することができました。

それは出発の2ヶ月前のことです。小川理子会長が行かれなくなったので、代わりに私が代表として出席するようにと伝えられました。それからは時間との戦いでした。たくさん英文資料を読み、メールに答え、荷物を用意し、その

姿はまるで猪のようだった、と主人はあとで言っていました。

GFS世界会議は3年ごとに開かれます。今回はダブリン、3年後はウエールズと決まっています。200人ほどの参加者のなかで私たちは総勢7名の小さなグループでした。ジュニアデリゲートの高木泉さん、シニアデリゲートの私、神崎雄二チャプレン、その他オブザーバー4人(うちジュニア1人)。それぞれ出発地が違うので現地地で集合です。英語が通じるのか? 何か聞かれたらどう答えよう? などと心配ばかりがつのりました。

そして、日本から14時間以上もかかってやっと主催地ダブリンのキングズホスピタルという学校に着くと、議長のエミールは私に向かって「日本が大変なときに、よく来てくれた」と言って抱きしめてくれたのです。そのときの彼女のあたたかさは忘れません。何か大きなものに包まれたようで、ほっとした気分になりました。

いよいよ、泉さんのカントリーレポートの発表のとき。直前までケラケラしていたというのに、自分で被災地の写真をプロジェクターに映しながら説明を始めると、声が詰まって話せなくなってしまったのです。被災地で会った人たちが苦労している姿が脳裏に浮かんでしまったのでしょ。ところが、この状況が思わぬ効果を得ました。会場の隅々から、すすり泣きが聞こえました。みんなもらい泣きをはじめたのです。こんな可愛い子が泣いているのに、どうしてGFSワールドは助けてあげないの?

結果、GFSワールドは日本のために緊急支援ファンドと作ることを決定し、閉会礼拝の献金は被災して困っている日本人のために捧げるということにまくなりました。

私たちはこのことをどう受け止めたらよいのでしょうか? 日本GFSは、東日本大震災への具体的な支援活動の方針をまだ決めていません。そ

れなのにGFSワールドはこんな私たちのためにお祈りとお金までくださったのです。この好意をむだにはできないでしょう。

私たちは小さな群れに過ぎません。しかし、そんな小さな群れであっても、私たちがらしい支援の仕方があるはずだ、と私は思います。早急に方針を決定し、小さいことからでもよいので働いていきたい。そして一緒に歩こうプロジェクトと共に歩き、被災した方々に寄り添っていきたい、と思っています。

すべては皆さんのお祈りによって動かされました。感謝の気持ちでいっぱいです。大変なことがあった以上にお恵みもたくさんいただきました。本当にありがとうございました。

■(追記) 今回の世界会議には加盟国20か国から18か国が参加しました。最終日のインターナショナルデーにはバスを連ねてアイルランドの子ども達(家族も含めて)1,200人が参加して大会の雰囲気を盛り上げました。また、このたびのGFSワールドではGFSの「G」の意味を見直して、これからのGFSは広く青年グループ全体を受け容れていこうではないかということになったことを報告いたします。



南アフリカから参加したシニアデリゲートスーザンと御主人、高木泉さん、スーザンのお嬢さん

東日本大震災支援

「いっしょに歩こう!プロジェクト」 仙台オフィスから ③

事務局長 司祭 パウロ 中村 淳

「いっしょに歩こう!プロジェクト」のプログラムが始まっています。これまでの物資支援に加えて独自プログラムが始動し始めました。7月9日から南三陸町志津川で外国人支援の一環として、フィリピン人女性への日本語教室を毎週土曜日に行っています。彼女たちは全員がお嫁さんとして南三陸に嫁いでこられた方々で、日本語の会話はとても上手です。しかし、読み書きはもう少しで、そのことによって苦勞されています。全員が被災者ですが、避難所では大切な情報が文書の掲示によって行われています。お子さんの学校のこと、放射線のこと、様々な支援のこと、大切なことばかりです。彼女たちにはそれが読めませんでした。頼りにするお連れ合いたちも被災の混乱の中で詳しい説明をする余裕がありません。彼女たちは大変大きな不安の中にいました。さらに、彼女たちの多くは日本のお父さんお母さん、お舅さんとお姑さんと暮らしています。フィリピンの家族を大切にする伝統は彼女たちをお父さんお母さんを残してフィリピンにはいけない、と思わせました。

多くの家族が食べていくためには多くの働き手が必要です。働き場が必要です。しかし、志津川では水産加工業を中心に大打撃を受け、働く場所もままなりません。そこで彼女たちはホームヘルパーの資格を取って、福祉の現場で働くこ

とを願いました。けれども、その資格取得には日本語の最低限の読み書きが不可欠です。わたしたちは彼女たちのこの想いに寄り添いたいと思い、日本語の読み書きレッスンとヘルパー資格取得への道筋を付けることにしました。彼女たちもまたお母さんです。お母さんたちが勉強している間、子供たちの保育を行うことも始めました。そのプログラムがすでに3回行われています。

折に触れて一緒に聖餐式をおさげしています。彼女たちは全員がカトリックですが、志津川にはカトリック教会がありません。みんな長い間陪餐をしていませんでした。共にささげた聖餐式は本当に喜びにあふれたものとなりました。

また、名取市の仮設住宅、箱塚桜団地（この仮設住宅には仙台基督教会の信徒さんが入居されています）では毎週木曜日にお買い物バスの運行が始まりました。仮設からはお買物が不便です。ことにご高齢の方々にとっては車が無いことが大きな支障となります。病院からは定期的に迎えの車が来てくれる様になりましたが、買い物に使いたいとの自治会長さんの要請によってわたしたちがワゴン車を使って買い物バスを運行することになりました。運転は仙台にお住まいの信徒さんが引き受けてくださっています。7月21日に第1回を行いました。大変たくさんの方のご利用がありました。さらに、この団地では8月19日に夏祭りが行われます。この夏祭りにわたしたちのプロジェクトも参加させていただくことになりました。

このほかにも多くのプログラムが始動し始めていますが、次回以降にご報告していきます。

(管区宣教主事)



「いっしょに歩こう!プロジェクト」の
ホームページが出来ました。

<http://nssk.org/walk/>

日本聖公会管区事務所ホームページ: <http://www.nssk.org/province/>

☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。

comm-sec.po@nssk.org 広報主事(鈴木)宛て